詩人の「プロペラ」
——全集刊行までの草野心平による宮沢賢治評価——

大野　香織

はじめに

今日、日本の近代詩人の一人に、宮沢賢治を数えないことはまずないだろう。賢治は「彼の名は日本近代詩人中もっともポピュラアなもの」[1]と評価され、妹トシの臨終をテーマにした「永訣の朝」は長年にわたり多数の高等学校国語教科書に掲載され続けている。

賢治は、詩人としても童話作家としてもほぼ無名のまま早逝した。『心象スケッチ　春と修羅』と『イーハトブ童話注文の多い料理店』の二冊を出版し、さらに「岩手日日新聞」などに作品を掲載していたが、高見順は賢治の死について『昭和文学盛衰史』の中で「宮沢賢治が同じ昭和八年の九月に寂しく死んでいったことを、当時私は知らなかった。宮沢賢治という詩人の名も知らなかった」[2]と回想している。

ほぼ無名とされていた賢治が今日のように著名な作家となるには、賢治の作品を世に広めようとした人々の努力が欠かせなかった。中でも草野心平は賢治の追悼会で生前に面会することが叶わなかった賢治を「日本で一番すきだった詩人」と呼び、彼の全集を出すことに力を尽くした。そして彼が事実上編集長となった文圃堂版『宮澤賢治全集』の刊行は、賢治作品が世に広まるためのきっかけとなった。高村光太郎や横光利一らも賢治を評価し、全集をともに編集した人物である。彼らの存在も全集刊行が成功するために必要不可欠であった。宮沢賢治の作品が広く知られるまでの過程については米村みゆきらによってこれまでに論じ[3]

られてきた。しかし草野心平が賢治をどのように評価していたのかという点や、心平が全集を刊行できた背景については詳らかにされてこなかった。

本論では宮沢賢治が「無名詩人」から「詩神」へと変化していく過程を、草野心平の評価や『文學界』との関係から論じていく。

一　大正末期から昭和初期の賢治評価

賢治は生前二冊の単行本を出版した。『心象スケッチ　春と修羅』は一九二四年四月に刊行された。この詩集は『東京日日新聞』の新刊案内の中で、「ほしいまゝな感情の表現は、いかにも迫まるものがある」が「多くは余りに独自の世界に立てこもりすぎて」いるために「難解」なので「今後の作に期待」[4]すると評された。『心象スケッチ　春と修羅』の売れ行きなどから考えると、恐らくこの記事の内容は、多くの人の評価と一致するところがあるのではないか。これに対して辻潤は『心象スケッチ　春と修羅』を高く評価し、「この詩人はまつたく特異な個性の持ち主」[5]と述べている。

草野心平が初めて読んだ賢治の作品も、この『心象スケッチ　春と修羅』である。中国滞在時の心平に、友人が古書店で入手したものを贈ったのである。「三人」と題した文章で心平は「現在の日本詩壇に天才がゐるとしたなら、私はその名誉ある「天才」は宮沢賢治だと言ひたい」とし、「異常ケンイン力」[6]が自分をひきつけるのだと述べた。また彼はこの詩集を手にしたときのことを『文學界』の中で以下のように記している。

> 大正十三年に多分夏、中華民国関東で詩集「春と修羅」を読んでから、今年で恰度十三年になる。二十歳位の脳髄で「春と修羅」を読んで解繹したかは、おそらく滑稽でゞもあるだらうが、兎も角一瞥寒いふるひを自分の生理に感じたその時以来、いまだにこの本は自分にとつては一つの化けものである。[7]

『心象スケッチ　春と修羅』が心平に与えた衝撃は強く、この衝撃は賢治の死後始まる全集刊行の原動力の一つであ

ったに違いないだろう。心平はなぜそれほどまでに強い衝撃を受けたのか。それを考えるためにはまず当時の詩壇がどのような状況にあったのかを考えなければならない。萩原朔太郎は一九三七年に、それ以前の詩壇について以下のように述べた。

> 久しい間、詩壇には北極の長夜が続いた。希望もなく目標もなく、人々は闇黒の中を手探りながら、放浪者のやうにさまよひ歩いた。かくの如くして、詩は遂に亡びるのではないかといふ懐疑さへが、誰の胸にも微かに起こつた。[8]

朔太郎の言う「北極の長夜」とはどのようなものだったのだろうか。朔太郎は一九三六年までの「詩学」は「詩の散文化にすることによつてポエヂイそのものを自滅的に消散」させようとしたものだと論じた。さらに「散文化」とは形式の問題だけはなく、詩精神にも関わる問題である。

> 何となれば詩を散文化するといふことは、単に詩形態の上ばかりでなく、詩精神の本質たるリリシズムそのものを失喪させ、詩を散文的レアリズムの文芸に解体さすことになるからである。（中略）だが遂に此処に至つて、詩精神それ自体さへが散文化し、ポエヂイそのものの本質が全く闇黒の中に葬られた。この長い夜の歴史は、正しく詩壇に取つて地獄の季節であつたのだ。[9]

ここで「詩精神」が散文化した詩と呼ばれるものの中に「プロレタリア詩人の自由詩」が含まれている。朔太郎はプロレタリア詩を「概ね無内容」な「素朴な」「散文の類」と評した。

プロレタリア詩は大正末期から盛んに創作されるようになった。馬渡憲三郎の論によるとプロレタリア詩は中野重治の活躍により「マルクス主義芸術にもとづくものとして、明確な方向」[10]を持つことができたとされている。さらに馬渡はこの時期のプロレタリア詩の特徴を「プロレタリアートについての一般的な命題を観念的に歌うのではなく、プロレタリアート自身の日常における現実の闘争、その生活の実態を描こうと」したものだと論じた。「生活の実態」

を書き連ねるという行為を、朔太郎は、詩を「レアリズムの文学に解体」することとしたのではないか。

草野心平はこの「地獄の季節」を突破するためにいくつかの同人雑誌を立ち上げている。それは『銅鑼』と『学校』と『歴程』である。伊藤新吉はこれら三誌を、「おおまかにいって一つらなりの〈詩的〉系譜の問題を含んでいる」[11]ものとしている。『銅鑼』は一九二五年四月に中華民国広東で創刊された。編集責任者はその時々によって異なるが、創刊の中心となった人物は草野心平である。思想に関して言えば、『銅鑼』は第一〇号に掲載された「第二次銅鑼巻頭言」[12]からはアナーキズムを強く主張していることが読み取れる。同人の名前が雑誌に明記されたのは第五号がはじめてであり、草野心平、黄瀛、宮沢賢治、高橋新吉を含む九人の名前が載っている。このとき、同人らはほとんどがまだ無名の詩人であった。高橋新吉だけは『ダダイスト新吉の詩』[13]をすでに出版しており、「世間的にもセンセイションを捲きおこしていた」[14]と心平は回想している。高村光太郎は同人ではなかったが、『銅鑼』に何度か寄稿している。

心平は『銅鑼』の第二号編集後記の中で以下のように決意を述べている。

シンケンに詩に生きるものの慟哭した法悦！？

「銅鑼」はいよいよ固くケツソクした。吾々はあまりにチャーナリスティツクな空虚な日本の詩壇風帯をやぶるプロペラであらんことを自負してゐる。[15]

心平が目指す詩とは「ヂャーナリスティツク」ではない詩である。ここでいう「ヂャーナリスティツク」とは「生活の実態」を書いたプロレタリア詩も含まれている。

では心平が高く評価した宮沢賢治の詩は、どのようなものであったのだろうか。賢治は「春と修羅」を中国滞在時に読んでいた心平から手紙で『銅鑼』への同人加入を誘われた。それに対して賢治からは「詩人としては、自信がないが、サイエンティストとしては認めてください」[16]という言葉が詩と為替とともに送られてきたという。心平は『春と修羅』読後に、「ふるひ」[17]を感じたと賢治の死後に回想している。この「ふるひ」は何によって出現したのか。心平が賢治の詩を評価する際によく使用するキーワードに、「言

葉の発見」や「特異な言葉」などがある。

古来詩人の名誉の一つは対象に命を与える最後の言葉を最初に発見することであろう。（中略）そのことは感性の自然発生のみの成し得ることでもなく、意識圏内の問題だけでもない。それは感性と英知の共同作業によって成し遂げられる。そのような行き方で宮沢賢治は数多くの言葉を発見した。（中略）一々書いていたらキリがない程いろんな難物がやたら滅法にばらまかれていることも「春と修羅」の特性といわなければならない。こうしたテクニカルタームや特異な言葉をよく解ればいいのだろうが、しかしわからずとも、それらの言葉にさまたげられずに、大体意味が解せるということは、それらの語彙が辞書からもってきて、普通の言葉に置き換えたものではないからである。[18]

ここで言われている「特異な言葉」とは何であるのか。『春と修羅』の「序」冒頭部分を引用し、「特異な言葉」を抽出する。

わたくしといふ現象は
過程された有機交流電燈の
ひとつの青い照明です
（あらゆる透明な幽霊の複合体）
風景やみんなといつしょに
せはしくせはしく明滅しながら
いかにもたしかにともりつづける
因果交流電燈の
ひとつの青い照明です
（ひかりはたもち　その伝統は失はれ）

引用箇所において「特異な言葉」と呼ばれるものは「有機交流電燈」と「因果交流電燈」の二つだろう。心平は賢治の「詩の栄養」となるものは「科学」と「化学の骨組み」[19]であるとし、後に賢治の詩を「幻想と物理の混淆」[20]と論じた。この「混淆」は、心平が賢治を同人にすることで『銅鑼』に組み込もうとした力である。これは心平が持ち得ていない力だった。

「ヂャーナリズム」を否定した心平が、『銅鑼』が刊行されていた当時に書いていた詩は高橋新吉らの前衛詩運動の[21]影響を色濃く受けたものだった。前衛詩とは日常的に使用するような表現による詩作を否定し、詩の中に記号や大きさの異なる字の挿入などを行い、視覚にも訴えるような詩を作り出そうというものである。心平は前衛詩運動の代表者とも言える高橋新吉が当時の詩壇に与えた影響について、以下のように書いた。

海はなぎだつた。人々はゆつたりと泳いでいた。そんな平安な詩に——突然、髪を振り乱したダダイストが、がばがばつと浮かび上がつて眼をむいた、詩壇はびつくりした。[22]

さらに心平は高橋新吉を『ダダイスト新吉の詩』[23]に収録した「皿」の中で、積み上げられていく皿を視覚的に表現した一節を引用する。

皿皿皿皿皿皿皿皿皿皿皿皿皿皿皿皿皿皿皿皿皿

倦怠
額に蚯蚓が這ふ情熱
白米色のエプロンで
　皿をふくな

『銅鑼』廃刊と同年に出版された心平の詩集『第百階級』[24]の中に収録された「生殖　Ⅰ」は次のように「る」の文字だけを連続して配置した詩である。

るるるるるるるるるるるるるるるるるるるる

「生殖　Ⅰ」以外に『第百階級』の詩には記号が文章中に組み込まれていたり、カエルの幼生を絵で表すなど前衛詩によくみられる手法が使われている。心平は、普段使いの語彙でただ報道的に日常を書きだしたものとは一線を画したプロレタリアの表現をしようとしていたのだ。『第百階級』を高村光太郎は「ニヒルの巣窟」ではなく「積極無道の現実そのもの」であり「いくらでも突進する」[25]と紹介した。

高橋新吉の手法を取り入れた心平だが、「三人」の中で新吉と同様に「尊敬」しているとした賢治の「混淆」という表現方法の影響はその作品の中にあまり見受けられない。『第百階級』収録の「だから石をなげれるのだ　だから石をうけれるのだ」には「虚無圏」「顕微鏡的一点」という「サイエンス」と関連づくような言葉があるが、賢治のように一見関連がなさそうな部分への挿入とは言えない。一九三一年刊行の『明日は天気だ』や一九三五年刊行の『母岩』にも賢治詩作品にあるような表現方法は使われていない。心平は賢治の技術を自身の作品に取り込んではいなかった。

だからこそ、賢治は心平にとって必要な人物だったのではないか。詩壇の現状を打ち破る「プロペラ」の一部に、心平は自分とは異なる表現技術を持った詩人賢治を求めたのだ。心平は賢治の死後に創刊され現在も続く同人誌『歴程』にも、彼を物故同人として遺稿を掲載した。死してなお、賢治は心平の「プロペラ」であった。しかし、心平には評価されていた「特異な言葉」も多くの人には「難解」すぎるとされ評価をされなかった。

賢治は詩人としても童話作家としても「知る人ぞ知る作家」という枠から抜け出せないままその生涯を終える。「岩手日日新聞」[26]には小さく賢治の死が報じられた。そこには「日本詩壇に嘗てない特異の存在」を示す「巨星」と書いてある一方で、『春と修羅』が夜店でいわゆるゾッキ本として売られていたことも記されている。

二　『宮澤賢治追悼』から文圃堂版全集刊行まで

草野心平が賢治の死を知ったのは、高村光太郎に来た宮澤清六からの電報によるものだった。光太郎は心平から『心象スケツチ　春と修羅』を紹介され賢治を知っていた。光太郎との初対面の場で、心平は『春と修羅』について熱く語った。心平と光太郎の付き合いは深いもので、光太郎は心平の才能を評価し心平の同人活動を支援していた。光太郎の賢治に対する評価は悪いものではなかったようだが、心平ほど熱を上げていたようではなかった。

光太郎から賢治の訃報を聞くとすぐに心平は花巻に向かった。心平がこのように花巻行きを急いだのは、賢治の葬儀に間に合うためというよりも、賢治の作品が「賢治を理

解しない家族」によって捨てられたり、焼却されてしまうことを懸念したからである。実際のところ、これは杞憂であった。遺族は賢治の遺稿を処分することなく、以降は整理されていた。また、賢治逝去後、弟清六によって『鏡をつるし』という作品集が発行された。この作品集は知人や友人に配布されたもので限定三〇部であった。表紙には「宮沢賢治全集抜粋」とあり、具体的に全集を出すという話はまだないものの、遺族には全集刊行の意志があったことが推測できる。収録された作品は詩作品や童話以外にも童謡が多く収録されていた。童話のメロディーは清六が記憶をもとに書き起こしたと序文に書かれている。作品集は宮沢賢治追悼会で配布された。またこの会では草野心平は講演会を行っている。そして追悼会を通じて知り合った人々から原稿を集め、草野心平は『宮沢賢治追悼』という小冊子を刊行する。ほとんどの執筆者は生前の賢治を知らずに文章を寄せているため、米村みゆきはこの小冊子は「奇妙な追悼集」[27]だと指摘した。

『宮沢賢治追悼』の発刊を通じて、横光利一は宮沢賢治作品と出会うこととなった。横光利一はそれまで賢治の作品に目を通したことはなかったが、この『宮沢賢治追悼』をきっかけとし、全集の発刊にも大きな影響をもたらすこととなった。

横光利一は賢治を「天才詩人」と呼び、賢治作品が周知されるべきだと主張し、「これはわたくし一個人の問題といふよりも、優れた天才詩人の全集として、日本の「文芸復興」という現実の文学史的事実をすくなからず誘掖するところあらうと思ふ」[28]と述べている。

遺族である宮澤清六、そして草野心平、高村光太郎、横光利一が加わりいよいよ『宮沢賢治全集』の発刊計画が動き出すこととなった。

宮沢賢治の全集を初めに出版したのは、当時『文學界』の出版を行っていた文圃堂である。文圃堂に『宮澤賢治全集』の企画が持ち込まれる前に、書物展望社より発刊する計画があった。これは横光利一の口添えによるものだった。しかし無名の作家であり、しかも全集は九巻ほどになるということで、書物展望社からの刊行計画は遅々として進まなかった。草野心平が「イーハトーブの村長」と呼んでいた書物展望社の担当編集者石塚友二も草野心平に急かされ

てはいたが、彼に決定の権限はなくどうすることもできなかったようである。

全集刊行の計画が頓挫しかけている折に草野心平が銀座を歩いていると、武田麟太郎と野々上慶一に偶然出会う。

宮沢賢治全集刊行に就いては私は武麟に話したことはなかったが、彼は噂で知っていたらしく、その進行状況を私にきいた。私はありのままを話した。すると武田麟太郎は、

「君のところでやってみないか」

といった。

「やりましょう」

と年少の野々上君は即座に答えた。[29]

文圃堂からの発刊は、横光利一が持ちかけたのではと考えられることも多い。だが、草野心平と野々上慶一は以前より知り合いであり、横光利一を通して文圃堂からの出版が決まったというわけではなさそうだ。このことについて野々上慶一は以下のように追想している。

当時、宮沢賢治は中央では全く無名であったが、心平さんを通じて私は、その詩や童話に接して、なんとなく心惹かれるものを感じた。（中略）しかしまあ直接的には、心平さんの度の外れた熱意にほだされて、経済的には冒険といっていい全集発行に踏み切ったように思い返される。

（引用者注、草野心平が賢治全集を持ちかけたのかという問いに対して）そうです。最初はどこかから出そうと思っていたんじゃないのかな。だから計画はだいたい出来ていたんじゃないかしら。三冊だったかどうかはわからないけど。ともかく無名だし、わけがわからないから、いいところだけ入れてやろうじゃないかということで三冊にしたんですからね。[30]

全集の企画以前から知り合いであった草野心平に半ば押し切られる形で、野々上慶一は文圃堂からの刊行を承諾した。高見順はこの刊行を「あまり売れそうもないその全集

を犠牲的に出版した」と述べ、また心平について「全集の出たときの草野心平の喜び方と言ったら無かった」[31]と述べている。一九三四年九月の『文學界』には、編集後記よりもあとに「宮澤賢治全集」と記した扉があり、一四ページにわたり賢治の写真や、全集の内容、『宮沢賢治追悼』からの記事が掲載されていた。その中の「刊行の辞」には以下のように記されていた。

刊行の辞

東北の僻遠小岩井農場を中心とした大コンパス圏イーハトヴ地方に、その強力な未完成の生涯をとぢた宮澤賢治氏は、この国の文学史上の一つの稀有な現象であった。むしろ傳説的でさへあつたその存在に相応しい彼の苦悩する心奥の展開は、昭和八年九月二十一日、氏の三十八歳の最後の日まで続いた。

チエホフの一頁を三行で書き得るといふ不敵な自尊と、さうした人にのみ見られる自虐と絶望から、遺された作品ノートにも「発表を要さず」とさへ記されてある。しかしもっぱらそれら詩や童話や感想は、コスモス的な構想に根生え、その長い息といひ、振幅や震度、斬鬼な外容といひ、よく天才のみが発見し得る設計であつた。

（中略）

茲に弊店が謂はば無名の一詩人の全集を刊行するといふ、画期的の暴挙を敢てする所以のものは、氏の作品の一時代ならざる「不易」の示唆を享けるが故に他ならない。[32]

「刊行の辞」は草野心平、もしくは高村光太郎が書いたものということで、こちらにも「一詩人の全集」という言葉がある。全集の目次を見ると、心平らが賢治を童話作家というよりも詩人として捉えていたことが推測できる。第一巻と二巻の紙面をほぼ詩作品に使っていた。全三巻の全集は、第一巻は「春と修羅」と書かれている。「春と修羅」の第一巻に収録できなかった部分は第二巻に収められ第二巻には短歌や文語詩と「農民芸術概論」などの研究が収録された。第三巻は童話と劇を収めたものである。童話は「イーハトブ童話」「花鳥童話」「寓話」に区別されている。この第三巻に収められた童話は、賢治の生前に刊行された『イ

ーハトブ童話　注文の多い料理店』に収められていた作品[33]は一作品も収録されていなかった。この初出作品が多く掲載されているという状況は、『鏡をつるし』と同様のものである。

心平が「ふるひ」を感じた『春と修羅』から多数再録された全集であるが、実際に売れたのは三巻の童話の方だったという。売れ行きは「童話の巻が千部、詩の巻が八百部[34]」とあるように童話の売れ行きのほうが好調であった。これは全集の三巻刊行前に、横光利一の批評「宮沢賢治全集　世紀を抜いた詩人」が読売新聞に掲載されたことや[35]、中原中也が評価したこと、さらに自身が『文學界』に論を載せたことなどがよい影響になったのではないかと心平は述べている[36]。野々上は増刷を決めたが、その二〇〇部については売れなかったようで、高見順は『文學界』の原稿料を野々上に請求すると「「宮沢賢治の本でカンベンしてくれないか。えらく帰ってきた[37]」と頭を掻きかき」言ったと述べている。この野々上の言葉を受けて、賢治の全集はまったく売れなかったと高見順などは述べているが、実際には童話は一〇〇〇部という当初の予定数は売れていたのである。

こうして日の目を見た『宮澤賢治全集』であるが、一九三九年に今度は十字屋書店から刊行されることが決まる。これは文圃堂のもとにいた大内正一という男がきっかけを作った。大内正一は野々上慶一の遠縁のもので、「店の二階に雑居」していたのだが、「同じ本屋の若い連中と共に女遊びなどをおぼえ、お定まりの金詰り」になる。そこで彼は店で使用した本の紙型を持ち出して、金の工面に当てた。その紙型の中には『宮澤賢治全集』もあり、渡した先は十字屋書店だった。野々上慶一はこの時のことを以下のように記述している。

何十年も昔のことで詳細な記憶は薄れたが、ある時、嘉吉さんから、大内におたくの紙型を担保に金を融通したが期限が来ても返済しない、もうすこし待ってみるが、若い者に有り勝ちの事だから勘弁しておやんなさい、ときかされた。（中略）嘉吉さんが生真面目に改まって、妙なご縁で宮沢賢治を知り、作品を読んでみたところ大いに感激して、実はすっかり賢治ファンになってしまった。ついてはお願いがある、自分は物好きなところがあり、

いずれ山の本を中心にして出版をやってみたいと兼々思っていたが、賢治に取りつかれてしまった。賢治の作品は三冊では収まらず少なくとも五、六冊分はあるのではないか、自分としては是非手がけてみたいが、如何なものでしょう、と率直に気持ちをのべ、どうか考えてみてほしい、と私は返答を促されたのである。[38]

酒井嘉吉は野々上慶一に情熱的に賢治の紙型を売るように求める一方で、賢治の全集が採算をとれる商材であるという目星もつけていた。酒井嘉吉は古本市に出ていた賢治全集の値段が「月毎に値上がりしていることに注目」していた。[39] 書物展望社で「イーハトーブの村長」とあだ名されていた石塚友二が、十字屋書店に移り彼によって酒井嘉吉に引合されていた。十字屋書店で石塚友二は賢治の全集に関わる仕事に就くことになり、「「宮澤賢治編集の仕事にありついてねえ、ありがたいですよ」といかにもうれしそうにしていた」[40]と野々上慶一は記している。十字屋書店初の出版物となった『宮沢賢治全集』は全七巻で刊行された。これも実際の編集は心平がおこなったが、光太郎や横光利一なども責任編集者として名を連ねている。

最も早く全集刊行を企画した書物展望社と同じころ、別の会社でも賢治の全集を出そうという動きがあった。それは中央公論社でのことであった。編集者の八重樫昊は社長から「無名の人の著作で後世にのこるような出版プランはないか」といわれ「宮沢賢治全集以外にない」と断言した。そして賢治の作品が「「後世にのこる」ことを何かによって証明しようと」したが、「当時まだあまりに無名だった」ことから、中央公論社からは全集が出ることはなかった。[41]

文圃堂と中央公論社の違いを考えれば、まずは会社の規模が思いうかぶ。しかしそれ以上に、草野心平という強力な賢治推薦者の影響があるだろう。心平は賢治を詩の「天才」と評し続け、ひたすら賢治全集の発刊に力を尽くした。また周囲の著名な文人たちを引き入れ、賢治を評価させることで「宮沢賢治」という存在が評価されるべき存在だと広報し続けた。これができたということは心平自身も詩人として評価をされていたからである。世間に評価されている詩人が「日本の原始から未来への一つの貫かれた詩史線の上の一つの類いまれなる大光芒で宮沢賢治があることは

もう断じて誰れの異議も挾めない一つのガンとした現実である」とまで追悼会で言い切った。この心平の評価が文圃堂全集を動かし続けたエネルギー源である。

『文學界』に広告が載ったことも賢治全集にとって意味のあることだったはずである。『宮澤賢治全集』の広告は『文學界』に幾度か掲載されるが、その中でも『文學界』二巻一号に掲載された広告は中原中也『山羊の歌』の広告とともに一ページに収められており、横光利一の「天才詩人」が引用されている。『宮澤賢治全集』には責任編集者として高村光太郎、宮澤清六、草野心平、横光利一が名を連ねている。一方で『山羊の歌』には推薦者として高村光太郎、辰野隆、小林秀雄、河上徹太郎、三好達治の名があった。小林秀雄ら推薦人を従えた『山羊の歌』と広告ページを分け合っている『宮澤賢治全集』はあたかも、中原中也のように文學界同人に認められた詩人の全集のようである。

おわりに

もし心平が賢治と面会したことがあったならば、彼はこのように情熱をかけて賢治の全集をつくっただろうか。「彼のやうな善玉は、悪の青い血が血管を流れてゐる自分などは、却つて知らなかつた方がよかつたのだ、そんな風にも考へる」[42]と心平は述べている。心平は賢治の詩だけではなく、賢治自身も「善いもの」として評価している。心平と面会する以前に賢治がこの世を去ってしまったため、心平は賢治という人格を美化しすぎていたのではないだろうか。この問題は今日まで続く賢治を聖人視する風潮に大きな影響を残しているだろう。

しかし心平が宮沢賢治を「善玉」の「天才」と言い続けたおかげで、文圃堂から全集が刊行されたのだ。これは賢治本人だけの力では成し遂げられなかったことである。心平が追悼会で語った「だいすき」という感情を原動力としてプロデュースされたからこそ、賢治は今なお詩人として著名でいられるのである。中原中也は賢治作品がなかなか世に知られなかったことについて以下のように述べている。

誰かが書の価値を公表しない限り、書は弘まらず、殊に『春と修羅』如き地方で印刷されたものの場合尚更さう

なのだが、誰一人として今迄その今請ふ公表をしなかつたといふことは、実を以て不思議であり、「運命の悪戯」でしかないのである。私自身が無名でさへなかつたならば、何とかしたでもあらうけれど、私が話をした知人の人たちはどう迂つ潤りとしてゐたものか。[43]

作品そのものだけの力で、多くの人に評価されることは難しいことである。評価をされるためには、その作品を推す人が存在することが必要である。そして推薦人自身が評価されていることも重要である。大岡昇平は『山羊の歌』創刊後、中也の「詩人としての地位は着実に上昇」したと指摘した。[44]それ以前の中也は『文學界』同人、特に小林秀雄からは高く評価されていたが、詩壇においては無名だった。これに対して、心平は『銅鑼』や『学校』などの同人活動を通じて、多くの詩人と交流を持ち、萩原朔太郎に「新人を発見することに、特殊な俊敏の目を持つて、雑誌編集者として適材」[45]だと言わしめた。その交流の中で高村光太郎などから評価を受けていた。だからこそ心平は中原中也では達成できなかった賢治のプロデュースをやり遂げられたのだ。

心平によるプロデュースは全集刊行で終わることはなく、その後も教科書に賢治の伝記を掲載するなどの形で続いていく。教科書に掲載された伝記にも彼が賢治を「善玉」の「天才」とする考えが反映されているものだ。心平が賢治に対して抱いた「幻想」は現代の賢治評価にも大きな影響を残している。

［注］

1　吉田精一『日本近代詩鑑賞〈昭和編〉』（一九九〇・六、創拓社）

2　高見順『昭和文学盛衰史』（一九六五・九、講談社）「同じ」とは、賢治の他界が小林多喜二の虐殺と同年の出来事だったことを指している。

3　米村みゆき（『宮沢賢治を創った男たち』（二〇〇三・一二、青弓社）他には山下聖美（『賢治文学「呪い」の構造』（二〇〇七・八、三修社）などが論じている。

4　『東京日日新聞』（一九二四・五・一付朝刊）

5　『読売新聞』（一九二四・七・二三付朝刊）

6　草野心平「三人」『詩神』（一九二六・八）
7　草野心平「宮澤賢治覚書」『文學会』（一九三四・一〇、文圃堂）
8　萩原朔太郎「現代詩壇総覧」『文學会』（一九三七・一、文芸春秋社）
9　注8に同じ。
10　馬渡憲三郎『昭和詩史への試み』（一九九三・一〇、朝文社）
11　伊藤新吉「解説―次代からの回想」『銅鑼復刻版解説』（一九七八・三、日本近代文学館）
12　草野心平「第二次銅鑼巻頭言」『銅鑼第一〇号』（一九二二・四、銅鑼社）
13　高橋新吉『ダダイスト新吉の詩』（一九二三・二、中央美術社）
14　草野心平「銅羅についての私的回想」『銅鑼復刻版解説』（一九七八・三、日本近代文学館）
15　草野心平「編集後記」『銅鑼第二号』（一九二五・五、銅鑼社）
16　注7に同じ。
17　注7に同じ。
18　草野心平「宮澤賢治覚書（二）」『文學界』（一九三五・一〇、文圃堂）
19　注18に同じ。
20　草野心平「四次元の芸術」『新潮』（一九五〇・三、新潮社）
21　猪狩雄一と山下真史は久保田淳編『日本文学史』（一九九七・五、おうふう）の中で前衛詩運動は「直接この運動に参加しなかった詩人たち」にも影響があり、「仏教的な世界観と岩手の風土に根ざした賢治の詩は、この前衛詩運動がもたらしたもっともすぐれた成果」と指摘している。
22　注6に同じ。
23　注13に同じ。
24　草野心平「生殖　I」『第百階級』（一九二八・一一、銅鑼社）
25　高村光太郎「序」『第百階級』（一九二八・一一、銅鑼社）
26　一九八二年九月二二日付の朝刊に掲載された。
27　注3に同じ。
28　横光利一「天才詩人」『文學界』（一九三四・九、文圃堂）
29　草野心平「宮沢賢治全集由来」『宮沢賢治研究』（一九五八・八、筑摩書房）

30　野々上慶一「賢治全集の紙型」『文圃堂こぼれ話』二〇〇一・三、小沢書店）

31　注2に同じ。

32　「刊行の辞」『文學界』（一九三四九、文圃堂）

33　『イーハトブ童話　注文の多い料理店』に収録されたのは「どんぐりと山猫」「狼森と笊森、盗森」「注文の多い料理店」「烏の北斗七星」「水仙月の四月」「山男の四月」「かしわばやしの夜」「月夜のでんしんばしら」「鹿踊りのはじまり」の九作品である。

34　小田光雄「野々上慶一と「宮沢賢治全集」」『日本古書通信』（二〇〇八・一二）

35　一九三四年一〇月二六日のものに掲載された。

36　注29に同じ。

37　注2に同じ。

38　注30に同じ。

39　注29に同じ。

40　注30に同じ。

41　八重樫昊「陽の目をみなかった宮沢賢治全集と宮沢賢治伝」『宮沢賢治全集月報第七号』（一九五六・一〇、筑摩書房）

42　注7に同じ。

43　中原中也「宮沢賢治全集　十年来の愛読者として」『作品』（一九三四・一一）

44　大岡昇平「解説」『山羊の歌・在りし日の歌』（一九五一、創元社）

45　注8に同じ。

※宮沢賢治作品本文は特に断りのない限り『新校本宮澤賢治全集』（一九九五年七月、筑摩書房）に依拠する。

※本稿では宮沢賢治の表記は「澤」ではなく「沢」を使用する。これは『春と修羅』の作者名に賢治自身が「沢」を使用したことに準じる。但し引用箇所についてはこの限りではない。

※傍線はすべて引用者によるものである。また、引用に際してはおいて旧字は適宜新字に改め、特別な事情がない限りルビは省略した。